様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 4 月 8 日現在

機関番号：１５２０１
研究種目： 基盤研究(C)
研究期間： 2010～2012
課題番号： 22530548
研究課題名（和文） 地域社会にみる死生観の現在に関する複合的研究

研究課題名（英文） Multiple study on the view of life and death in local societies

研究代表者
諸岡 了介 (MOROOKA RYOSUKE)
島根大学・教育学部・准教授
研究者番号：90466516

研究成果の概要（和文）：200 字
本研究プロジェクトでは、終末期ケアの現状を踏まえた上で、在宅ホスピス利用者遺族に対する国内最大規模の質問紙調査と、死生観に関わる思想史的・宗教史的な文献研究を含めた、死生観に関する多角的な調査と考察を行った。
その成果として(1)「終末期体験」の分布など人びとの死生観の現状の理解、(2)在宅ホスピスケアをめぐる文化的諸問題の分析、(3)現在の死生観にいたる思想史的･宗教史的背景の把握、さらには(4)調査フィールドとしての在宅ホスピスケアに関する方法論的整理を行うことができた。

研究成果の概要（英文）：
The result of this research project includes qualitative and quantitative description and analysis on several mutually connected topics as below: (1) the people's view of life and death especially regarding "the end-of-life experiences"; (2) cultural problems in practices of home hospice care today; (3) historical background of the view of life and death people have today; (4) characteristics of home hospice care as the object of research in contrast with in-hospital settings.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合 計
2010 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2011 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総 計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：社会学
科研費の分科・細目：社会学、社会学
キーワード：医療・福祉、地域社会、死生観、終末期医療

１．研究開始当初の背景

日本人の死生観に関しては従来少なからぬ研究が重ねられてきたし、近年では「死生学」の諸潮流も現れてきている。しかしながら、「死」が社会的に病院へと囲い込まれていることとも並行して、死に関する諸考察も生や死の現場に即したものとなっていない。例えば、思想史や民俗学における研究蓄積の主題は、霊魂・他界観念と葬送儀礼に著しく偏っ

ており、現在の人間の死生の実態に迫ったものは意外なほどに乏しい。他方、近年における「死生学」においては、死の文化面についての研究と、医療・福祉の現場についての研究が別々に存している傾向にあり、両者の有機的な交流が強く望まれる状況にある。

こうした状況を意識して本研究チームは、現在の終末期ケアの諸問題を意識した上で、人びとの死生観に関する社会学的・思想史的な調査と考察を試み、その一環として 2007 年には在宅ホスピス利用者遺族に対する質問紙調査を行った。本研究プロジェクトは、この 2007 年調査の成果と課題を承けて、さらなる調査研究の深化と展開を狙ったものである。

２．研究の目的

現在の終末期ケアの諸問題を意識した、人びとの死生観に関する社会学的・思想史的な調査・考察として、2007 年調査の成果と課題を承けた本研究プロジェクトでは、より具体的には以下のような点において研究の深化と展開を意図した。

(1) より厳密な統計的手法を用いた分析：在宅ホスピスケアの利用に関わる医療的・制度的諸要因のみならず、先行研究では手薄であった宗教行動や社会的属性といった文化面に関わる諸要因につき、2007 年調査よりも厳密な統計的手法を適用できる質問紙設計を目ざした。

(2) ケア現場の問題意識の反映：死の文化面に関する研究を医療・福祉の現場に活かすべく、医師やケア従事者との対話を重ねた上で、質問紙調査やその他の調査研究を設定することを狙った。

(3) 調査対象地域の拡大：2007 年調査の対象地域は宮城県に限られていたが、死生観には地域独特の文化が影響していることが考えられるため、調査対象や比較対象の地域的範囲の拡大を狙った。

(4) 広い歴史的文脈への位置づけ：単に現在の事実を明らかにするだけではなく、思想史・宗教史あるいは民俗学の知見を加えて、それらを歴史的な文脈に位置づけることを目ざした。

(5) ケア現場への還元：以上のような調査研究の工夫を重ねながら、最終的にはケア現場や一般社会へ還元できるかたちでの研究成果の公表を目的として掲げた。

３．研究の方法

この研究プロジェクトの全体は、(1) 在宅ホスピス利用者の遺族を対象とした調査票調査、(2) インタビューや研究会開催による、患者・患者家族・ケア従事者の声やその状況に関する情報収集、(3) 死生観に関わる思想史的・宗教史的な文献研究という三つの分担作業から成り、緊密な連携のもとに分担作業それぞれの成果を相互に参照しながら構成されている。

(1) 在宅ホスピス利用者の遺族を対象とした調査票調査については、宮城県・福島県の在宅療養支援診療所 5 ヶ所の協力を得、これら診療所のケアを利用し、2007 年 1 月から 2009 年 12 月までのあいだに看取りを行った患者家族（主介護者）に対する全数調査を行った。結果、総数 1191 のうち、575 票の回収があった（回収率 48.3%）。なおこの調査は、在宅ホスピス利用者を対象としたものとしては全国最大規模のものである。

(2) 患者・患者家族・ケア従事者に対するインタビューとしては、実際に在宅ホスピス医院に勤める研究協力者のひとりが主にこれにあたった。また、ケア従事者を交えた研究会としては、2003 年に宮城県で発足した臨床死生学の研究会（タナトロジー研究会）を母体にしながら、定期的な会合を持ち、現場からの声やアドバイスを得た。これらから得られたケア現場に関わる知見は、上述調査票の設計へと活かすとともに、調査票調査によって得られた結果の裏づけともした。

(3) 死生観に関わる文献研究としては、調査票調査の結果も参照しつつ、日本近世思想における宗教忌避の状況と、日本宗教史上における死者を感じる感性のゆくえについて、それぞれの分野を専門とするメンバーが追跡を行った。

４．研究成果

以上の研究プロジェクトから、次のような成果を得ることができた。

(1) 死生観の実態把握

現在の終末期ケアの現場から見いだされる「看取りの文化」の実際として、有効パーセントにして 41.8 ポイントにのぼる、広い「終末期体験」（〈お迎え〉体験）の分布が確かめられた。また各要因との相関を統計学的に検証した結果、これらの「終末期体験」の有無は特定の社会的属性や宗教的属性に左右されないことが確かめられた。さらに、こうした

「終末期体験」が必ずしも医療的介入を必要とするものではなく、むしろ患者やその家族にとって、いわゆるスピリチュアル・ケアに通じるような重要な意義を持つものであることを確認することができた。これらの調査結果は「2011 年在宅ホスピス遺族調査報告書」へとまとめた。

(2) 在宅ホスピスケアの実態把握

現在の在宅ホスピスをめぐる状況に関し、(a)ケア現場で大きな焦点となっている家族介護の実態、(b)病名告知・質的予後告知・量的予後告知といった種別の告知のありかたの実態、(c)在宅ケアを途中で断念したケースをはじめとして、病院・在宅間の移行を左右する諸要因といった事柄について調査・分析を進めることができた。ここから、現在の在宅ケアをめぐる主要な問題の背景にある制度的・社会的・心理的条件について見通しをつけることができた。これらの調査結果は(1)とともに、「2011 年在宅ホスピス遺族調査報告書」へとまとめた。

(3) 死生観の思想史的背景

思想史的・宗教史的考察を進めることで、現在の死生観に通じる次のような歴史的背景が明らかになった。すなわち(a)宗教忌避（超越性忌避）への傾向が、18 世紀に成立した徂徠学以後の実証主義における朱子学的な形而上学（陰陽五行論）をも拒否するという現世主義的態度に由来するものであることを指摘することができた。また、(b)人びとの死者を感じる感性について歴史的な検討を行い、戦前までは死者を恐怖の対象として描く描写がほとんどであること、それが仏教的枠組みの帰結であることが判明するともに、そこから仏教的枠組の支配を免れた現代の状況の特殊性を伺うことができた。こうした検討は、現代社会のホスピスケアにおける宗教の役割を考える上でも示唆的である。

(4) ケア現場との連携や還元

上記の成果について、ケア現場や一般社会への還元と対話を行った。研究会やシンポジウムを通じた交流・還元の他、『読売新聞』2012 年 6 月 22 日紙面、『文藝春秋』2012 年 7 月号、NHK「クローズアップ現代」2012 年 8 月 29 日放映回などの各種メディアにおいて本研究プロジェクトの成果が取り上げられた。

(5) 方法論的考察

調査フィールドとしての在宅ホスピスケアの特殊性について整理を行い、この主題に関する調査研究方法論について考察を深めた。現在の医療・看護領域の調査研究は病院環境を前提としているが、在宅環境では従来の調査研究の方法論をそのまま適用することはできない。この環境のちがいが意識されないかぎり、必然的帰結として病院環境を前提としたエビデンスを求められる現在の医療・看護の領域で在宅ケアの整備が立ち遅れていかざるをえないことを指摘した。

以上、(1)～(5)の各側面について、これまでにない新たな洞察や貢献を為しえたとともに、この分野に関する研究の今後について一定の指針を示すことができたものと考えている。

最後に付記しておくと、プロジェクトの期間中、本研究の主たるフィールドである東北地方は東日本大震災の激甚なる被害に遭うこととなった。震災が起きたのは調査票の回収期間中で、結果として調査集計を済ませることはできたものの、この震災を境に、死生観をめぐる状況にしても在宅ケアをめぐる状況にしても、いまだその影響を捉えきれない大きな社会的転回を迎えるにいたっている。次の課題として、こうした社会的転回を考察に入れた研究や実践が望まれよう。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

① 藤本穣彦、諸岡了介、相澤出、田代志門、在宅ホスピス調査の企画と設計、島根大学社会福祉論集、査読無、4 号、2012、17-30、<http://ci.nii.ac.jp/naid/110008916334>

② 桐原健真、関東大震災と近代日本のリーダー：渋沢栄一・後藤新平・吉野作造、年報日本思想史、査読無、12 号、2012、31-32

③ 諸岡了介、世俗化論における宗教概念批判の契機、宗教研究、査読有、85 巻 3 号、2011、623-643 、<http://ci.nii.ac.jp/naid/110008799190>

④ 諸岡了介、現代民話と〈お迎え〉体験、社会科研究、査読無、32 巻、2011 年、1-12

⑤ 桐原健真、「第三の開国」とはなにか？：戦後日本における自他認識の転回（1945～1980）、文化、査読有、74 巻 3 号、2011、1-20

⑥ 諸岡了介、地域の「看取りの文化」を反映した現代的臨床死生学の構築、山陽放送学術文化リポート、査読無、54 巻、2010 年、5-8

〔学会発表〕（計 10 件）

①桐原健真、弘道館祭神論争：会沢正志斎の神道思想、日本思想史学会 2012 年度大会、2012 年 10 月 27 日～10 月 28 日、愛媛大学（松山市）
②桐原健真、連続と断絶―服部之総の「親鸞」」、日本宗教学会第 71 回学術大会、2012 年 9 月 9 日、皇學館大学（伊勢市）
③ 照井隆広・相澤出・諸岡了介・田代志門、藤本穣彦・岡部健、「終末期せん妄」は本当に治療対象か?　第 17 回日本緩和医療学会学術大会 、2012 年 6 月 23 日、神戸国際展示場（神戸市）
④ 藤本穣彦・相澤出・諸岡了介・田代志門、在宅ホスピス調査の企画と設計、第 59 回東北社会学会大会 、2012 年 6 月 15 日、山形大学（山形市）
⑤ 諸岡了介、Visions of the Dead and End-of-life Care in Contemporary Japan、The 25th International Conference of the Association of North-east Asian Cultures、2012 年 6 月 8 日、西安（中国）
⑥ 桐原健真、護法・護国・夷狄、日本思想史学会 2011 年度学術大会、2011 年 10 月 30 日、学習院大学（豊島区）
⑦田代志門、一つのライフストーリーと複数の声、第 84 回日本社会学会、2011 年 9 月 17 日、関西大学（吹田市）
⑧桐原健真、世界観闘争としての真宗護法論、日本思想史学会 2010 年度大会、2010 年 10 月 17 日、岡山大学（岡山市）
⑨ 諸岡了介、終末期医療における民俗とスピリチュアリティ、日本宗教学会第 69 回学術大会、2010 年 9 月 4 日、東洋大学（文京区）
⑩ 桐原健真、The Quest for Mahayana: Kawaguchi Ekai and the Buddha’s ‘Golden Words.’第 20 回国際宗教史学会、2010 年 8 月 20 日、トロント大学（カナダ）

〔図書〕（計 4 件）

① 桐原健真、ソウル・景仁文化社、韓日文化交流基金・東北亜歴史財団編『1910 년－ユ 이전 100 년：한국과 일본의 서양문명수용（1910 年－その以前の 100 年：韓国と日本の西洋文明受容）』、2011、3-53
② 田原開起・諸岡了介、山陰中央新報社、島根県立 JST 人材育成グループ編『島根発！中山間地域再生の処方箋』、2011、10-17
③ 桐原健真、慶應義塾大学出版会、小川原正道編『近代日本の仏教者』、2010、245-275
④ 桐原健真、財団法人国際高等研究所、吉田忠編『19 世紀東アジアにおける国際秩序観の比較研究』、2010、111-126

６．研究組織
(1)研究代表者
諸岡　了介（MOROOKA RYOSUKE）
島根大学・教育学部・准教授
研究者番号：90466516

(2)研究分担者
桐原　健真（KIRIHARA KENSHIN）
東北大学・文学研究科・助教
研究者番号：70396414

(3)連携研究者
田代　志門（TASHIRO SHIMON）
昭和大学・研究推進室・講師
研究者番号：50548550

(4) 研究協力者
相澤　出（AIZAWA IZURU）
爽秋会岡部医院・研究員
研究者番号：―――

藤本　穣彦（FUJIMOTO TOKIHIKO）
九州大学・工学研究院・学術研究員
研究者番号：90555575